

《翻 訳》

『梁塵秘抄』に収める今様数首をポルトガル語へ訳す試み

——アナ・リタ・カリーリョ先生との対話から——

Tradução portuguesa de umas obras do «Imayō» (Imayō) contidas na colectânea intitulada *Riōginfixō* (*Ryōjinhishō*): Uma tentativa elaborada através da conversa com a professora Ana Rita Carrilho.

日 埜 博 司 (HINO Hiroshi)

キーワード 『梁塵秘抄』, 今様, 文学史料の学際的活用, 翻訳の“説明責任”

べっくさだのり  
別宮貞徳という翻訳家の名は、少しでもよい翻訳を、と心がける者には、よく知られているであろう。私は、雑誌『翻訳の世界』に長く連載され続けた別宮による「欠陥翻訳時評」の愛読者で、連載に区切りがつくたび、文藝春秋から刊行されていたシリーズの単行本 7 冊<sup>1</sup>はすべて手に入れ、熱心に、かつ、しばしば大笑いしながら読んだものである。これだけ読み込んでいけば、別宮の翻訳論のエッセン

---

<sup>1</sup> この 7 冊のタイトルは以下のとおり。『誤訳 迷訳 欠陥翻訳』(1981 年), 『続 誤訳 迷訳 欠陥翻訳』(1983 年), 『こんな翻訳読みたくない』(1985 年), 『こんな翻訳に誰がした』(1986 年), 『悪いのは翻訳だ——あなたのアタマではない』(1988 年), 『翻訳の落とし穴』(1989 年), 『翻訳はウソをつく』(1991 年)。このシリーズでは、番外篇として、大学入試英語問題のナンセンスぶりが——たとえば、問題の英文を読まずとも、常識に従って解答選択肢の和文を消去してゆけば、自然に正答へ辿り着ける(!), 等々——随時、大学の実名入りで取り上げられている。あとから読んで楽しむだけならまことに結構だが、全入時代でもなかった当時、たわけた悪問のせいで苦杯を嘗めたマジメな受験生がわんさかいたであろうと思えば、何と罪ツクリな、と言うほかない。

スはおのずと身につく。このような時評をかくも長期間継続した、別宮そのひとのフィロソフィというか動機づけを、私自身の言葉で不十分ながら要約すると、次のようになる。

本質的ならざる不注意なミスは、それが途方もない数ででもない限り、誰しも免れ得ないものであって、あげつらうには及ばない。ささいな語学的誤りより、むしろ深刻かつ有害なのは、①辞書的な語義にもたれかかっただけの、あるいは、日本語らしさを無視した、似て非なる日本語を用いて<sup>てん</sup>恬として恥じず、②達意にほど遠い、拙劣読むに堪えぬ悪文を書いたあげく、それを読んで理解できぬのは、読むほうのアタマが悪い、と尊大にも開き直り、③原著の醸すムードとはおよそかけ離れた雰囲気<sup>ちようりょうぼつこ</sup>の文体を用いながら、その可笑しさ、もしくは、場違いぶりも自覚できない——跳梁跋扈をやめない、そんな翻訳者を、この辛口時評を通じて、翻訳の世界から駆逐する……。

1926年生まれの別宮が、ちくま学芸文庫のために『ステップアップ翻訳講座——翻訳者にも説明責任が』(2011年)という本を書き下ろした。日本文学研究者エドワード・サイデンステッカーと那須聖の共著『日本語らしい表現から英語らしい表現へ』(培風館、1962年)に範をとり、幾例もの英文の訳例と、みずからの訳を並べ、これこれの箇所をなぜそう訳したか、を細かく検討することを通じ、別宮自身の翻訳論のエッセンスを改めて浮き彫りにしている。

翻訳者の“説明責任”を果たす、という点について、私自身、別段、それを自覚的に実行していたわけでもないが、みずから行なってきた翻訳の、特にこれは、という箇所に焦点を絞り、訳注なり補遺を草するという形でなら、及ばずながら、実践してきたことではある。



16 世紀半ばに広州近辺の華南を訪問しヨーロッパ語で初めての中国專著を著わしたポルトガル人ドミニコ会宣教師ガスパール・ダ・クルスの中国総論を和訳刊行したときに、忘れがたい思い出がある。

明代シナの社会福祉制度を論ずるくだりで、クルスは、aleijado(s)も、しかるべき公的扶助を受ける、と記述する。当初私は、この語彙を「不具者」と訳して編集者に提出したのであるが、これにクレームがついた。この訳書を最初に刊行してくれた明石書店は、差別やマイノティーの問題に関する良書を数多く刊行してきており、それゆえ当然、ある種の言葉の扱いにはきわめて敏感である(私自身、言わずもがなのことではあるが、日常会話で「不具者」や、ましてや「かたわ」などという、語感的にも実にいやな言葉は絶対に使わない)。編集者に対しては当初、こうした語彙は 16 世紀という歴史的文脈で用いられているのだし、当時の人権意識(?)に照らせば、不快な言葉であっても上記の訳語を宛てるほうがいいと思う、と提議したのだが、編集者には容認してもらえなかった。多少の不満を残しつつ、「身体に障害を負う者」という訳語を宛てることで折り合った。

ところが後日、改めてこの語彙を語源的に検証してみると、aleijado は「不具者」などという差別的語感を伴う語彙ではなく、ごく一般的に「身体<sup>しょうがい</sup>障害者」という、ごく中立的な価値しか有さぬそれであることがわかってきた<sup>2</sup>。

---

<sup>2</sup> José Pedro Machado, *Dicionário Etimológico da Língua Portuguesa*, Lisboa, Livros Horizonte, 4ª edição, 1987, vol. I, p.186 に見える aleijão(障害・損傷)や aleijar(〜へ障害・損傷を与える)の語義、およびその古い用例を検討しても、それらの派生語である aleijado へことさら差別的なニュアンスなり価値を帯びた訳語を与えるのは不当だと考えるに至った。

前記編集者からのクレームは、本来の語義的検証を踏まえたものでないことは無論であるが、結果として、このクレームこそ、語源的にもより正鵠<sup>せいこく</sup>を得た指摘であったことになる(再刊にさきだち、クルスの中国総論の和訳を本学の学内誌で再検証したとき、上記の“差別的”訳語を用いざるを得ぬゆえんを多少“論じ”たことがあるのだが、上述のところを鑑み、その記述を全面的に撤回する)。

同じ書物を講談社学術文庫の一冊として再刊した際、明石書店版ではまったく問題視されなかった「シナ」にクレームが来た。シナという語彙には、言うまでもなく、本来的に、かつ歴史的呼称として、侮蔑的なニュアンスはまったく含まれない。少なくとも、この本を利用してくれる心ある中国人研究者の中に、「シナ」という訳語に妙な言いがかりをつけてくる人など皆無であった。私としては、Japão (Japam) をジャパン(より術学的な表記を採れば、ジャパオンとなる)と音訳するその手法に準じて(より理窟っぽく述べれば、ポルトガル語を基準にしての中立的他称を、すべての国と地域に対し、例外を設けず用いる、という方法によって)、ポルトガル語の China をただ単純に音訳した、その帰結としての語彙、つまりシナ——もしくは16世紀ポルトガル語の発音に即してチナ——を必ず使わせて欲しいと要望したのだが、一介の無名学徒の力では如何ともしがたく、そのことに、今も、<sup>じくじ</sup>忸怩たる思いを禁ずることができない(なかならず、クルスがシナの国名の由来を論ずるくだりに関し、China をシナもしくはチナと音訳しておかねば、まったくのナンセンスを惹起するくだりがあり、当該箇所には、いささか不細工な注を附さざるを得なかった)。

ともあれ、上述のような、あるいはそれに類する釈明なり注記における補足説明なりが、私にとって、翻訳における“説明責任”の、少なくとも、その一端を果たす、という行為となるのであろう。

上記の営みを、そこそこ長い文の翻訳において、隅から隅まで、一字一句に拘泥しつつ遂行するなど、現実問題として、なかなかできることではない。が、限られた長さの、原著者が、精魂込めて書き綴った珠玉の名品をポルトガル語へ移す、

そのプロセスの一部始終を紹介し、大方の批評に供した、という例なら、私にも心あたりがある。「宮澤賢治『雨ニモマケズ』をどうポルトガル語へ訳すか——ベイラ・インテリオール大学アントニオ・フィダルゴ教授との対話から」(『流通経済大学流通情報学部紀要』13 巻 1 号[2008 年]所収)や、「『いろは歌』をポルトガル語へ訳す試み——アナ・リタ・カリーリョ先生との対話から」(同上, 14 巻 2 号[2010 年]所収)が、それに該当する。別宮の前掲『ステップアップ翻訳講座』が世に出るより前に、翻訳の“説明責任”を、多少なりとも自覚しつつ一文を草していたことに、わがことながら、喜びを覚える。



17 世紀禁教期に入った日本人キリシタンの告解をラテン文字による日本語で書き留めた『さんげろく』(ローマ, 1632 年刊)という書物がある。長崎とその近辺で、カトリック布教を実体験したイスパニア人ドミニコ会宣教師ディエゴ・コリヤードの編著である。“個人情報”の極致ともいべき信徒の告解を、ヴィヴィッドな日本語の話言葉のまま記録にとどめたという、その一点において、世界史的にもほぼ類例を見ぬ史料、と評することができる。

『さんげろく』に収める日本人キリシタン信徒の告解をポルトガル語へ直し、日本で公刊するその前提として、当初ポルトガル語で記した注釈のかずかずを、改めて日本語で再構成しつつあるのだが、その過程で、特に、日本人キリシタンが懐いたであろう、とりわけ、モーセの第五誡および第六誡をめぐる苦悩なり葛藤を、あつけらかんとした言葉で、あるいは<sup>やゆ</sup>揶揄し、あるいは笑い飛ばす、そのような文藝が、わが江戸期川柳の一ジャンルに存することがわかった。人情の機微を豊かなユーモアと、<sup>とうかい</sup>韜晦の精神でもってひねり出した、そのような川柳を特に区別してバ

レ句と呼ぶ(バレ句の選定や、その出典に関しては、すべて、渡辺信一郎『江戸バレ句 戀の色直し』[集英社新書、2000年]に依拠した)。

キリシタンの切々たる告解から窺<sup>うかが</sup>うことのできる、赤裸々にして真剣かつ高邁<sup>こうまい</sup>なる想いが、バレ句によって一気に卑俗の地平へ引きずりおろされ茶にされる、そんな例を幾つか拾うにつけても、カトリックのもたらした倫理規範と、日本人一般が旧来より馴染みきたったそれとの間に、どれほど大きな懸隔が横たわっていたか、を実感的に推測することができるであろう。

たとえば、再度にわたり、夜這いを仕掛けられた女性信徒の告解。かつて一度、撃退(?)したことのある、それと同じ男が性懲りもなく、再度の夜這いを仕掛けてくる。女は、いきなり身を竦<sup>すく</sup>められ、多少は「対捍・偏氣<sup>たいかん へんき</sup>」(抵抗・反抗)したものの、「心が自然傾<sup>じねん</sup>き寄って」、ついに罪に落ちてしまった、というもの<sup>3</sup>。このような女性キリシ

---

<sup>3</sup> 'Numa outra vez, como noutra ocasião, o mesmo homem entrou às escondidas, agarrando-me à força, de maneira a que nem me mexesse nem bulisse, com a intenção de me violar. Como não gostava dele de início e não tinha pretensão, nem por sonhos, de fazer tal coisa com ele, mostrei-lhe repugnância e resisti-lhe um pouco, mas gradualmente tendi a ter carinho por ele, caindo, por fim, no pecado uma vez. Esta é a minha primeira experiência de ter cometido tal pecado.' (日埜博司『コリヤード 懺悔録』ポルトガル語全訳注——第六誠「邪淫を犯すべからず」に関わる15の告解』『流通経済大学論集』40巻1号, 2005年, 147頁。CF. *NIFFON NO COTOBA NI YÔ CONFESION vo mōsu yōdai to mata Confesor yori goxensacu mesaruru tame no canyōnaru giō giō no coto. Danguixa no monpa no Fr. Diego Collado to yū xucqe Roma ni voite core vo xitate mono nari. 1632. MODVS CONFITENDI ET EXAMINANDI Pœnitentem Iaponensem, formula suamet lingua Iapocica. Auctore Fr. Didaco Collado Ord. Præd. Romæ à die 20. Iunij, anni 1632, pp. 40, 42. 大塚光信編『コリヤード さんげろく私注』[臨川書店, 1985年]に原著影印が収載される)*

タンの“心情”は、次のようなバレ句がよく言い表わしているではないか。

あれあれの れの字段々 紛失し

(『俳風柳多留』)

「あれあれ」というのは、江戸期、拒絶や困惑を表わす言葉だったようだ。ところが、心ならずも、ひとたび情欲に火が点くや、嫌悪の情は徐々に雲散霧消、ついには「れ」の字がはずれて、快樂のあまり漏れる「あ」だけが残ってしまった……という、まことにもってケシカラヌ、教条主義的フェミニストが見たら、目をむいて怒り狂いそうなバレ句である。

それはともかく、これをどうポルトガル語に直すか、私の関心はそこにしかない。もちろん自由な訳であることをお断わりしておく。

「淫行を迫られた女性、初めのうちこそ、『あれあれ』など、いろいろと拒絶の言葉を口にはするが、よこしまな情欲が昂まるにつれ、徐々に彼女から『れ』という音節が消えてゆく、それが常例だ」という具合に、説明的な和文をこしらえたうえ、下記のようなポルトガル語へ直した。

As mulheres forçadas a copular, ainda que digam várias palavras de rejeição tais como “Areare” nos começos, costumam perder gradualmente a sílaba “Re” ao passo que se lhe aprofunda a deleitação torpe.

もうひとつは、かなり危ない男性信徒の告解。おそらくは朱印船に乗り、南方へ商売に出た亭主の留守を狙って、告解者が、留守宅の女と姦淫に耽った、という趣旨であるが、亭主が帰朝するに及び、女の妊娠が露見しでもしたら大変と、子胤

つまり精液が、内に入り留まらぬよう、「からくり」を致しました、という告白だ(夫ある女との不義密通は言うに及ばず、避妊措置を施すこと、それ自体がカトリック倫理に違背する)<sup>4</sup>。

これと同類の際どさも、朱楽菅江<sup>あけらかんこう</sup>の撰とされるバレ句の集成『最破礼』に収める

---

すでに今 最期の襖 亭主明け

という川柳に、みごとに描かれていると言ってよい。これまた自由な訳であることをお断わりしたうえで、「寝床で、男と、よこしまな情欲を遂げ終えようとする、まさにその刹那<sup>せつな</sup>、姦婦の夫、がらりと紙製の可動式扉を開ける……。よくあることだ」というふうに、ポルトガル語へ直した。

Quando está a pique de terminar a deleitação torpe com um homem na cama, o marido da adúltera abre a sua porta levadiça de papel. Uma coisa que acontece de vez em quando.

---

<sup>4</sup> Numa outra vez, durante a ausência do seu marido, cai em pecado com uma mulher casada. Se quando o marido regressasse do estrangeiro ao Japão, como seria normal, ela estivesse grávida, este matá-la-ia, por isso mesmo, temendo-o, fiz uma invenção artificiosa de maneira a que não lhe ficasse dentro a minha semente da criança.’(日埜博司『コリヤード 懺悔録』ポルトガル語全訳注——第六誠「邪淫を犯すべからず」に関わる 15 の告解」127, 129 頁。NIFFON NO COTOBA NI YÔ CONFESION vo môsu yôdai to mata Confesor yori goxensacu mesaruru tame no canyônaru giô giô no coto, p. 38)



ついでにもう一例。

カトリックの性道徳は、物理的な(?)淫行に及ばずとも、女人との一義を脳裡に思い浮かべた、その妄念そのものが第六誡に違背する、と説く。事実、『新約聖書』「マタイによる福音書」(5:27-28)には、そのような想念を懐くことそれ自体に対する誡めが見える。このような妄想のみによる姦淫について言えば、男の信徒ばかりか、女の信徒も、これに違背する罪を犯した、と打ち明ける告解を拾うことができるのだが、ここでは前者のタイプに属するそれを挙げてみる。

すなわち、遠目にも「見目容<sup>みめかたち</sup>」よき女を見るたびによからぬ妄念沸き起り、誘惑を振り払うこともあったけれど、悪念に屈服したことの回数こそ、あまりに多く、その回数など覚えてすらおりませぬ、というのがそれ<sup>5</sup>。

普通の男なら誰しも思い当たるところのあるであろうこの告解。その微妙な心理を、女人に邪念を懐きつつも本懐(!)を遂げることできぬ本人自身が作者となり、おのが可笑しさ、みっともなさを茶にしてしまう、という粋な(?)川柳を見つけた。それは――

---

<sup>5</sup> ‘Sempre que vejo mulheres lindas e de feição e figura eminente e encantadora, ocorrem-me à ideia maus pensamentos, cogitando quase sempre: «Oxalá pudesse copular com elas!», mas, de vez em quando, consigo evitar cair no pecado, botando de mim os ditos ruins pensamentos. É, porém, tão frequente cair neste vício que nem me consigo lembrar ao certo do número de vezes que o cometi. Em suma: sempre que formosas mulheres passam em frente dos meus olhos, cometo o pecado com umas atrás das outras.’(日埜博司『コリヤード 懺悔録』ポルトガル語全訳注——第六誡「邪淫を犯すべからず」に関わる15の告解」130～131頁。NIPPON NO COTOBA NI YÔ CONFESION vo môsu yôdai to mata Confesor yori goxensacu mesaruru tame no canyônaru giô giô no coto, p. 38)

おれをした かるうと思う いい女

(『川柳評万句合勝句刷』)

区切りの不自然さに目をつむれば、定型どおり、5-7-5 の韻を踏んでいる。

わが勝手なイメージとしては、襟元など緩めて、意味深長な視線を送りつつ、しやなりしやなりとやってくる「いい女」。当方のぎらぎらした視線を感知してはいるが、わたしゃ、お前が思うほど、安くも軽くもないよ、というその<sup>つら</sup>面が憎い。当方の魂胆なり下心が「いい女」に見透かされている、そこが<sup>たま</sup>堪らぬなあ、という趣旨であろう。

こんな感覚なら、ポルトガル人にもブラジル人にも逐語訳で容易に通じさせようと考え、次のとおり、私なりの解釈を素直に訳しておいた。

Está passando por aí uma mulher gostosa que deve cuidar que estou querendo  
fazer amor com ela.



第一誡(「御一体のデウスを敬い、尊み、奉るべし」)におけるキリシタンのさんげの、その苦惱なり葛藤なりを仏教的世界観から逆照射してくれるような作品を、たとえば『梁塵秘抄』の中に見出すことができはしまいか、と思い立ち、そこに収められる今様数首をポルトガル語に直してみた。

第五誡(「人を害すべからず」)や、第六誡(「邪淫を犯すべからず」)におけるほど、キリシタン告解者の心情的機微をストレートに逆照射する、そのような作例は、第一誡をめぐり、残念ながら今のところ、うまく抜き出すことができない。そこでやむなく、私一個の個人的嗜好に即しつつ拾い上げた今様のみ、ポルトガル語へ訳すにとど

める。しかる後、フォントサイズ9の文字で、それぞれをどのような考えをもって訳したか、校閲者からどのような教えを受けたか、結果として、どこがどのように改善されたか、等々、を略述し、上記の“説明責任”を果たすことに替える。

2011年夏にEUエラスムス・プログラムの一環として、ベイラ・インテリオール大学で開催された「外国人のためのポルトガル語夏季集中講座」へ学生たちとともに赴いたとき、その講師を務めるアナ・リタ・カリーリョ先生に、すでに一応作り終えていた今様の拙訳を、幸運にも、じっくりと検討してもらうことができた。幾つかの箇所については、いかに語義的に正しくとも、音読のリズムや、文の滑らかな流れという観点からすれば、訳をこう補正したほうがよろしい、というところにまで踏み込んで、貴重な指導を賜わった。いつもながらのリタ先生の溢れるような温情に、心からの敬意と感謝を表す。

『梁塵秘抄』に収められた下記の5首は、リタ先生にも口ずさんでもらう便宜として、それぞれを16世紀キリシタン資料風のラテン文字によって書き綴ってみる。このラテン文字と、独特の長音記号により、『梁塵秘抄』当時の日本語発音を、かなりの程度まで正確に写し取ることができるであろう(たとえば、オ長音の開合の区別や、ズとヅ、ジとヂという、いわゆる四つ仮名の弁別、ハ行音をFa, Fe, Fi, Fo, Fuと写すこと、など)。キリシタン宣教師の考案した日本語表記法といえば、1603年、長崎で日本イエズス会によって刊行された『日葡辞書』におけるそれが最も有名かつオーソドックスであるが、ここでは、敢えてそれを採らず、通詞バテレンとして著名なポルトガル人イエズス会宣教師ジョアン・ロドリゲスが1620年にマカオで刊行した『日本小文典』(*Arte Breve da Lingoa Iapoa*)で用いた日本語表記法を用いる。

『梁塵秘抄』のテキストは、佐佐木信綱校訂『新訂 梁塵秘抄』(岩波文庫, 1933年, 1941年改版)から正字のまま写す。訳を試みる今様は、いずれも「梁塵秘抄巻第二」に収められ、校訂者が作品に附した通し番号をアラビア数字で書き添えた。

まず、「法文哥 二百廿首」のうち「佛哥廿四首」に収めるもの――

ほとけ つねに いませども、現ならぬぞあはれなる、ひと おと あかつき 暁に、ほのかに夢  
み たま  
に見え給ふ。

26

Fotokeua tçuneni imaxedomo,

Vtçutçu naranuzo auarenaru.

Fitono voto xenu acatçuqini,

Fonocani yumeni miye tamö.

Ainda que Fotoque se digne sempre a existir,

Todavia, como sou homem humilde, não o alcanço de modo claro com os  
meus olhos.

Numa madrugada silenciosa sem movimento humano,

Digna-se a aparecer de maneira velada no meu sonho.

いまだき、敬語表現が日本語特有のものである、などと言えば、日本語を客観視することを知らぬ、あまりに視野狭隘かつ無知蒙昧の発言として、道理のわかった人々の失笑を買うであらう。

ポルトガル語でも、見かけ上の時制を過去未来形もしくは不完了過去形にすることにより、婉曲な丁寧表現もしくはへりくだり表現を作ることが可能であり、しかも、その使用頻度は日常会話においてきわめて高い。これとは別に、主として書き言葉において、動詞そのものが直接的に敬意を内包する、というケースがあり、たとえば、*dignar-se a* に不定法を後置するという

『梁塵秘抄』に収める今様数首をポルトガル語へ訳す試み

語法が、それにあたる。この動詞(再帰動詞プラス前置詞 a)を用いることにより、「佛は常にいませども」という尊敬表現を、いささかも無理なく作ることができる。

第二段における「私は凡庸な人間なので」に相当するポルトガル語は、私意で補ったものである。homem(人間)にかかる形容詞として、当初, mediocre を用いたところ, リタ先生は私に, mediocre という形容詞は, あなたが考える以上にネガティブな価値を有する語彙だが, それでよいか, と質問なされた。仏をうつつに捉えるだけの修養を積んでいない凡愚の身, つまりこの今様の作者が自己をそこまで卑下しているのか, というのが, 御質問の趣旨である。そうは思いません, と答えると, それなら, この形容詞のかわりに humilde を用いればよい, と判断なされた。これなら謙譲的な気持ちがより適切に伝わるだろう, と。

「ほのかに」を表現するため, 私は, 別の形容詞を伴う副詞句を用いたが(de maneira obscura), 形容詞 obscura を, リタ先生は velada と訂正なされた。薄絹のヴェールに覆われた, というふうな意味であるが, 語感といい神秘性を帯びたそのイメージといい, この形容詞の効果で, 実に美しく訳文を締めくくり得ていると思う。

次は、「法華經廿八品 百十五首」中、「提婆品十首」に収めるもの――

女人<sup>いつ</sup>五つの障<sup>さはり</sup>あり, 無<sup>む</sup>垢<sup>く</sup>の浄土はうとけれど, 蓮華<sup>にごり</sup>し濁<sup>ひら</sup>に開<sup>ほ</sup>くれば, 龍女<sup>ほとけ</sup>も佛  
になり<sup>なり</sup>にけり。

116

Nhonin itçutçuno sauari ari.

Mucuno jödoua vtokeredo,

Renghexi nigorini firacureba,

Riũnhomo fotokeni narini keru.

317

As mulheres têm cinco elementos que as impedem de se tornarem em

Fotoques.

Se bem que ainda se lhes encontra afastada a Terra Pura do «Iôdo» – paraíso

do Fotoque –,

Assim como florescem as flores de loto nas águas lamacentas,

A mulher-dragão, considerada como pecaminosa, conseguiu, por fim, alcançar

a salvação, tendo-se feito Fotoque.

仏教には、もともと女人蔑視の思想など存在しなかった。この今様は、当時の女性に渴望された女人成仏の教えを鮮やかに謳い上げた作品であるとされる。解釈はいろいろあるのだろうが、明白な女人差別の思想が看取されうると言ってよい。一見したところ、そのような思想が、本来の仏教そのものに淵源しているのか、と思いたくもなるが、ガウタマ・シッダールタ自身は、そのような女人蔑視の思想とは無縁であった(それどころか、あらゆる種類の差別を徹底的に否定しようとするのが、インド仏教の基本的考えであった)。

インドに生まれた仏教が日本へ伝播するに際し、その仲介者の役割を果たしたのは、主として漢訳された仏典であった。仏教が伝播するにあたり、それが経由した土地土地に根ざす伝統思想——中国における儒教的男尊女卑もその典型例のひとつ——が漢訳仏典には色濃く刷り込まれているのだそうだ。その経緯を、植木雅俊『仏教、本当の教え——インド、中国、日本の理解と誤解』(中公新書、2011年)が興味深く明らかにしている。

次は、「法文哥 二百廿首」のうち「雑法文哥五十首」に収めるもの——

ほとけ むかし われら つみ ほとけ ぐ み し  
佛も昔は人なりき、我等も終には佛なり、三身佛性具せる身と、知らざりけるこ

そあはれなれ。

232

Fotokemo mucaxiua fito nariki.

Vareramo tçuniua fotoke nari.

Sanxin buxxõ guxeru mito,

Xirazarikeru coso auare nare.

Fotoque (\*) fora antigamente um homem comum sem pompas nem letrado.

Nós tornar-nos-emos por fim em Fotoques se atingirmos a iluminação  
espiritual.

Desconhecendo que somos por natureza dotados das três virtudes necessárias  
para nos tornarmos em Fotoques,

Parece-nos tão lamentável estarmos a negligenciar os exercícios das leis  
budistas.

(\*) Aqui se trata do próprio Gautama Siddarta, cujo título honorífico é Butda.

ガウタマ・シッダールタ、すなわち釈尊も、もとはといえば、ごく普通のひとであった、取りたててきらびやかなカリスマ性もなく、卓越した学識もない……、という、第一段の後半部分は、私意で補った。明らかに補足過剰という思いもなくはないけれど、にもかかわらず、この補いが必要と考えたのは、そのようなガウタマ・シッダールタさえ、悟りを得ることができた、我らも死ねば仏になりうるし、そうなるための美質を凡愚の身さえ本来的には具えている、それを成就するに必須な精神修養を怠っているだけだ、悟りを開き得た偉大なるガウタマ・シッダールタその

ひとさえ、ももとはは……ということ、あらかじめ強調しておく必要性を感じたからである。

「我等も終には佛なり」は、これを「涅槃の境地に到達すれば、我らも仏に生まれ変わるであらう」と訳した。「涅槃」は「ニルヴァーナ」の音訳であり、この語彙の原義は、燃えさかる煩惱の炎が一気に吹き消された状態、を指す。これをポルトガル語で *iluminação espiritual* と表現するが、この言葉は、知識人になら、これ以上余分の説明を施さずとも容易に理解できるだろうとのことであった。

次は、「四句神歌百七十首」のうち「雑八十六首」に収めるもの――

ごうとし ふ かめやま した いづみ ふか こけ ふ いわや まつ を こずえ つる  
萬劫年経る龜山の、下は泉の深ければ、苔生す岩屋に松生ひて、梢に鶴こ  
あそ  
そ遊ぶなれ。

316

Mangô toxi furu cameyamano,  
Xitaua idzumino fucakereba,  
Coke fusu iuayani matçu uoite,  
Cozuyeni tçuru coso asobu nare.

No sopé da montanha divina que se crê ser apoiada pela tartaruga que já vive  
por infinitos anos,  
Por brotarem as águas puras da profundidade de uma fonte;  
Crescem em abundância numa casinha de pedra coberta de musgo os velhos  
pinheiros,  
Em cujas copas andam a brincar os groux brancos.



Nota explicativa: Trata-se de uma cantiga «Imayō» («Imayō» de acordo com a pronúncia quinhentista) representada por ocasião dos acontecimentos felizes, pois nela se encontram enumeradas as coisas que os japoneses têm por auspiciosas: «Came» (tartaruga, isto é, longevidade); «Idzumi» (fonte, ou seja, pureza); «Coke» (musgo, isto é, serenidade); «Matçu» (pinheiro, ou seja, firmeza); «Tçuru» (grou, isto é, elegância).

昔、リスボアに滞在していたとき、今様の演者グループが巡回公演にやってきましたので、そのお世話をした。めでたい場にふさわしいこの今様など披露してはどうか、とグループに勧めるため、私が『梁塵秘抄』から選び、あらかじめ訳しておいたのが、これである(実際には、この今様ではなく、ポルトガルの国民詩人カモンイスの大叙事詩『ウズ・ルジアダス』の、かの国ではおそらく中学生でも知っているであろう第一歌第一スタンザが、今様の演者によって原語で披露された)。あまり仏教思想とはあまり関係なさそうな作品であるが、せっかくだから掲げておく。「亀」「泉」「苔」「松」「鶴」がそれぞれ象徴すると思われるものをポルトガル語の注で明示しておいた。

最後は、『梁塵秘抄』に収められた今様のうち、間違いなく、最も人口に膾炙<sup>かいしや</sup>するもの。「今様狂い」と綽名された集成者後白河法皇(1127-92)の心性を探るにふさわしい作品と考え、訳した。これも「四句神哥百七十首」のうち「雑八十六首」に収める。

あそ 遊びをせんとや生れけむ、 たわぶ 戯れせんとや生れけん、 あそ こども こゑ 遊ぶ子供の聲きけば、 わ  
が身さへこそ動<sup>ゆる</sup>がるれ。

Asobiuo xentoya vmarekemu.

Tauabure xentoya mumareken.

Asobu codomono coye kikeba,

Vaga mi saye coso yurugarure.

Que felicidade a de ter nascido só para brincar!

Que deleite o de ter nascido só para zombar!

Atraído pela voz das crianças a brincarem,

Estremece-me todo o corpo de modo espontâneo.

第一段と第二段は、感嘆文として処理した。第一段の *felicidade* のすぐあとの定冠詞 *a* (女性/単数) は、女性名詞の *felicidade* をもう一度繰り返すかわりに、上記の *a* のみ置き、*felicidade* の繰り返しに替えたもの。何という歌だったか、リタ先生は思い出されなかったが、ファドの女王アマリア・ロドリゲスの某曲の歌詞に、これと同一の語法が用いられていた記憶がある、とのことであった。確かに感嘆文にふさわしい力のこもった語法だし、音読に際してのリズムといい安定感といい、申し分ない。第二段の感嘆文でも、これと同じ手法を用いた。こちらでは *deleite* が男性名詞であるから、この名詞を繰り返すかわりに定冠詞 *o* (男性/単数) を置く。

第三段も、実に心地よいリズムに満ちている——と信ずる——が、それを実現するに与って力あるのが、最後の *brincarem* という人称不定法である。通常の不定法 *brincar* で締めくくるのに比べると、余韻があり、格段に座りがよい。ちなみに人称不定法は、ロマンス語であるとゲルマン語であるとを問わず、数あるヨーロッパ諸語の中で、ポルトガル語にのみ存在するという珍しい語法。

「百聞は一見に如かず」を ‘Ver é crer.’ (= ‘To see is to believe.’) という。‘Vermos é cremos.’

『梁塵秘抄』に収める今様数首をポルトガル語へ訳す試み

と表現してもよいが、後者の人称不定法を用いることにより、「我らが見ること」(our seeing)と、「我らが信ずること」(our believing)という、一語では表現不能なフレーズを、ポルトガル語では、それぞれただの一語中に閉じ込めて表わすことができる。